

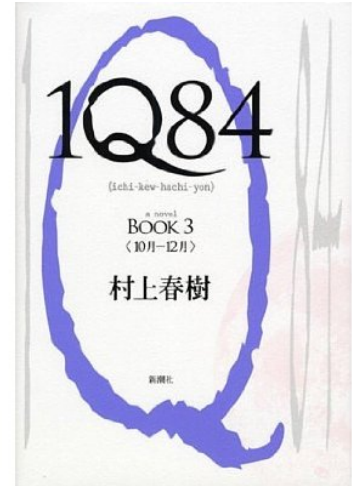
DOKU-GAKU 勝手にチョイス!!

1 Q 8 4 B O O K 3

(Wikipedia より)

10歳の時に会って、離ればなれになった青豆と天吾は、この世界で自分一人で生きていく孤独に耐えながら、リアリティの感じられない日々を暮らしていた。しかし、1984年に同じ組織に対する活動にそれぞれ巻き込まれていく。そして、青豆は現実とは微妙に異なっていく不可思議な1984年を「1Q84年」と名付ける。

Book1、Book2では、スポーツインストラクターであり、同時に暗殺者としての裏の顔を持つ青豆を主人公とした「青豆の物語」と、予備校教師で小説家を志す天吾を主人公とした「天吾の物語」が交互に描かれる。Book3では2つの物語に加え、青豆と天吾を調べる牛河を主人公とした「牛河の物語」が加わる。



健

小説はよく織物に例えられることがある。ストーリーの流れを縦糸とするなら横の糸は登場人物だ。ネタやエピソードは模様や飾りといったところか。BOOK 1, 2は横糸と模様がかみとなり面白く読めるものの本筋のストーリーが脇役になってしまい起承転結の「起」の部分ぐらいにしかなくなっていない。只、内容から推理をするとありきたりの話に落ち着きそうだし作者の意図はストーリーではなく、内包するテーマ、主人公たちの生き方、考え方にあるようなので拘る必要は無いのかもということは何回かの感想に書いた。BOOK 1, 2の本筋はオウムと思われる組織「さきがけ」の裏にはリトルピープルなるものが支配していることを「ふかえり」という少女の「空気さなぎ」という小説によって示唆される。その小説の代筆をしたのが天吾でありその組織内で行われている虐待をつかんだ青豆とそれを支援する影のグループはさきがけの教祖暗殺を実行する。ラストは天吾を生かすためには青豆の死が必要と言った教祖の言葉、「1Q84」からの脱出が不可能と感じた青豆が自分に向けて拳銃の引き金を引くところで終わっている。BOOK 1, 2には明らかになっていない部分や謎が多く、読了後の関心は果たして続刊があるのか？青豆の生死は？天吾と青豆の邂逅は？というものだった。

その辺を巡って cacco 氏と結構熱く感想を言い合った。そんな理由でBOOK 3でいきなり青豆が自殺を思いとどまっているのには脱力した。前2冊では青豆と天吾の章を交互に展開していたがBOOK 3からは間に牛河の章が割り込んでくる。牛河は青豆が暗殺した教祖に近づく際、組織が青豆の身上調査を依頼した探偵であったが正体を見抜けず暗殺を実行させてしまったため組織から青豆の行方を捜査するよう命じられる。

BOOK 3はこの3人が過去の事実を回顧・分析しながら現在、未来の行動を選択する課程

を交互に書かれて行くため忘れていた部分も思い出しながら読める。感想として前作を補足しながらまとめに入っているような内容であるが小説的には「承」の部分ぐらいにしかなっていない。牛河の生い立ちも特殊なもので醜く生まれたことが生涯に影を落としている。ゆえに探偵としての能力に自我を見出した牛河の自信・粘着質の気質は執拗だ。BOOK 3では青豆、天吾、牛河の三様の孤独、生き方が鮮明に描かれており牛河は読者に嫌悪感を抱くように書かれているが強烈なキャラは認めてしまう部分もある。それと牛河には逃げられたというもののこれだけ嫌われている人間に妻と二人の娘がいるというのはおかしくないかと変なところに反応してしまう。古い小説だが何故か似てもいない安部公房の「燃えつきた地図」の探偵を思い出してしまった。ともあれBOOK 3は青豆の教祖暗殺後の追跡劇であり本筋のストーリーはほとんど進展を見せない。牛河はBOOK 1・2ではそれほど重要な役ではなかったがじわじわ追い詰めてゆく手法に緊張感がありいつしか追うものが追われるものになってゆく展開は面白く読めた。反面、本書を書くきっかけとなったオーウェルの近未来小説「1984」から近過去小説「1Q84」を執筆したという作者の意図は書いているのかということと疑問であるしネタを振りっ放しなのは計算づくなのか行き当たりばったりなのか判断できないところもある。

TICA

ジョージ・オーウェルの「1984年」を読めばよかった。少なくともBOOK 1から3までまとめて読めばよかった。そうしたらあと少しで終わるってときに寝てしまうなんてことにならなかったかも。いや「1984年」でも寝ていた可能性が強いかな…。

牛河の最期の後味の悪さ。あんな殺され方をしなくちゃいけないほど悪い人間には思えない。でも、きっとこれもなにかの暗示でわかる人にはわかるんだろう。

辛うじて朔太郎みたいな『猫の町』や『ふたつの月』なんてキーワードはわからないながらも好きといえば好きかもしれない…と、遠回しにいうくらい村上春樹が理解できない。

村上春樹が海外で認められているということより、こういう本がベストセラーになるなんて日本人もすごいと素直に思う。出来れば私も村上春樹って面白いよねって言えるものを持っている人でありたかった。だってなんだかとても知的なもの…なんていう軽さじゃ村上春樹はだめだめね。

でも、こんなんでも海外のスピーチで【たとえ間違っても私は弱いものの側につく】といった壁と卵の話は好きなのです。

Cacco

Book 1、2を読み終わったときに、なにがどうなったかはよくわからないけれど、これで終わりもありだなと思った。どっちにしろきれいにすっきり終わりわかる終わり方を村上春樹はしなくてもいいんじゃないかと思っていた（自分の理解力が追いついていないということもあるけれど）。だいたいわたしはストーリーの本筋よりそのストーリーの中で生きる主人公たちの魅力にまいつているのだと思う。与えられた状況でどう考えどう生きるか、どんな人たちと出会いどう接して行くかということにとっても興味がある。

Book1、2の感想でも書いたけれど過去の村上作品の主人公たちは受動的な巻き込まれタイプだった。その流れをひくのが本編の主人公天吾。青豆さんのような能動的な主人公は異色ではないかと思っている。けれどその青豆さんの凜とした生き方はとても魅力的でBook1、2を牽引していた。

で、ここからネタバレに入ります。

その青豆さんは天吾と無事邂逅を果たしてからはあんまり魅力的でなくなる気がする。完全に天吾を尻にひいてるなあ。ふたりが会った途端にお似合いじゃなくなるような気がするの、10歳のときからの恋の成就に嫉妬してるからなのかしら？いやいややっぱりそんなことはない。わたしは「ひとりぼっちだけど孤独じゃない」生き方をしてきた天吾と青豆さんが好きなのだ。だいたい世間の人々は「ひとりぼっちじゃないけれど孤独」なんじゃないだろうか？そう、村上春樹の主人公たちは「ひとりぼっちだけど孤独じゃない」生き方を「きちんと」送っていける人なのだと思う。そのふたりがくつついちゃうっていうのは・・・ちょっと抵抗があるかも。わたしに春樹さんを紹介してくれたDG幽霊会員グリコちゃんは「春樹さんにハッピーエンドは似合わない」と言った。まさに同感。

話題の本だけに巻でもBook4はあるのか？という噂があるようだ。BOOK1〈4月～6月〉BOOK2〈7月～9月〉BOOK3〈10月～12月〉という構成なのでBOOK4〈1月～3月〉があると年が明けて1Q85年になってしまう。だからBOOK1の前段階の物語BOOK0（ゼロ）〈1月～3月〉が出るのじゃないかとも言われている。健さんはBook1、2を読んですぐにこの法則によって3、4があると断言していた。なかなか慧眼。で、わたしとしてはBook3を読み終わったとき、「これで確実に終わった！」と思ったので続編はないと思っている。いまさら前段階の話を書くなら新しい村上作品を読むことを希望する。

さてBook3だけれど、1、2から月日も経ち、忘れていた部分を新しい語り手の牛河さんが補ってくれている。全編が1、2のわかりにくい部分を補うという形になっていて、物語をぐいぐいひっぱるわくわくどきどきは1、2のほうが勝っているように思うし、教祖との対決や青豆さんの自殺など、ひりひり迫ってくる部分も1、2のほうがよりあったかと思う。Book3は1Q84「解決編」という分野になるんじゃないだろうか？

ところで新しい語り手牛河さんのエピソードで好きなところがある。優秀で見た目もよい両親、兄弟一家の中で実の子でないんじゃないかと疑われるほど牛河さんの容貌は醜いものだった。古いアルバムの中に係累でたったひとり牛河さんにそっくりな人物を発見し、一家は牛河さんがほんとうの身内だと納得する。牛河さんは思う。ある日俺が死んだあとみんなが俺を忘れるほど年月が経った頃、一家の中に俺にそっくりな子供が生まれる。皆は実の子なのか疑う。調べる。そして俺の写真が出てきて納得する。否応なくみんなが俺の存在を思い出す。それを考えると自分の哀れな人生も救われる気がする。牛河さんは言う。わたしの文章ではうまく伝わらないだろうけれど、どうしてこんな特に注目に値するエピソードではないエピソードに自分は惹かれるのか。きっと自分自身とよく似たものがその

中のどこかにあるからではないか。それではいったいどこが似ているのか？こんなふうに、本を読みながら思いを巡らすきっかけになることが村上春樹の小説にはある。村上作品は示唆に富んでいる。

そしてもうひとつ。天吾の周りに存在する女性ふたり。父親の病院の看護婦、安達クミと年上のガールフレンド。このふたりって天吾のお母さんなんじゃないだろうか？早くに亡くなった母親が息子を思って天国から派遣した疑似母（笑）根拠はないけれどなんだか母親と近いものをこのふたりに感じたりする。天吾って愛されキャラでうらやましい。

だらだら長くなったけれど、春樹さんを好きになって十数年、早寝早起きになったのは春樹さんのおかげ。きちんとした人になりたいと思っている自分に最近やっと気がついた。

そしてそれは村上春樹の小説を読んできたことが大いに影響している。早起きになりたい方は村上春樹を読まれることをお勧めします。それからテレビのながら視聴もやめられますよ、きっと。もちろんこうありたいと思う意志が先にあつての話だけれど。



「1Q84」は3巻合わせて数百万部という大ベストセラーになりました。いくつもの要因がうまく組み合わせられてベストセラーというものが生まれるのですが、その要因のひとつにはこのスピーチがあげられると思います。おまけに全文掲載しますので興味のある方は読みにくいですが読んでみてください。

村上春樹エルサレム賞スピーチ全文

こんばんは。わたしは今日、小説家として、つまり嘘を紡ぐプロという立場でエルサレムに来ました。もちろん、小説家だけが嘘をつくわけではありません。よく知られているように政治家も嘘をつきます。車のセールスマン、肉屋、大工のように、外交官や軍幹部らもそれぞれがそれぞれの嘘をつきます。しかし、小説家の嘘は他の人たちの嘘とは違います。小説家が嘘を言っても非道徳的と批判されることはありません。それどころか、その嘘が大きければ大きいほど、うまい嘘であればいっそう、一般市民や批評家からの称賛が大きくなります。なぜ、そうなのでしょう？

それに対する私の答えはこうです。すなわち、上手な嘘をつく、いってみれば、作り話を現実にすることによって、小説家は真実を暴き、新たな光でそれを照らすことができるのです。多くの場合、真実の本来の姿を把握し、正確に表現することは事実上不可能です。だからこそ、私たちは真実を隠れた場所からおびき出し、架空の場所へと運び、小説の形に置き換えるのです。しかしながら、これを成功させるには、私たちの中のどこに真実が存在するのかを明確にしなければなりません。このことは、よい嘘をでっち上げるのに必要な資質なのです。

そうは言いながらも、今日は嘘をつくつもりはありません。できる限り正直になります。嘘をつかない日は年にほんのわずかしかないのですが、今日がちょうどその日に当たったようです。

真実をお話します。日本で、かなりの数の人たちから、エルサレム賞授賞式に出席しないように、と言われました。出席すれば、私の本の不買運動（ボイコット）を起こすと警告する人さえいました。これはもちろん、ガザ地区での激しい戦闘のためでした。国連の報告では、封鎖されたガザ市で1000人以上が命を落とし、彼らの大部分は非武装の市民、つまり子どもやお年寄りであったとのことです。

受賞の知らせを受けた後、私は何度も自問自答しました。このような時期にイスラエルへ来て、文学賞を受けることが果たして正しい行為なのか、授賞式に出席することが戦闘している一方だけを支持しているという印象を与えないか、圧倒的な軍事力の行使を行った国家の政策を是認することにならないか、と。もちろん、私の本がボイコットされるのは見たくはありません。

しかしながら、慎重に考慮した結果、最終的に出席の判断をしました。この判断の理由の一つは、実に多くの人が行かないようにと私にアドバイスをしたことです。おそらく、他の多くの小説家と同じように、

私は人に言われたことと正反対のことをする傾向があるのです。「行ってはいけない」「そんなことはやめなさい」と言われると、特に「警告」を受けると、そこに行きたくなるし、やってみたくなるのです。これは小説家としての私の「気質」かもしれません。小説家は特別な集団なのです。私たちは自分自身の目で見たことや、自分の手で触れたことしかすなりとは信じないのです。

というわけで、私はここにやって参りました。遠く離れているより、ここに来ることを選びました。自分自身を見つめないことより、見つめることを選びました。皆さんに何も話さないより、話すことを選んだのです。

ここで、非常に個人的なメッセージをお話することを許してください。それは小説を書いているときにいつも心に留めていることなのです。紙に書いて壁に貼ろうとまで思ったことはないのですが、私の心の壁に刻まれているものなのです。それはこういうことです。

「高くて、固い壁があり、それにぶつかって壊れる卵があるとしたら、私は常に卵側に立つ」ということです。

そうなんです。その壁がいくら正しく、卵が正しくないとしても、私は卵サイドに立ちます。他の誰かが、何が正しく、正しくないかを定めることになるでしょう。おそらく時や歴史というものが。しかし、もしどのような理由であれ、壁側に立って作品を書く小説家がいたら、その作品にいかなる価値を見い出せるのでしょうか？

この暗喩が何を意味するのでしょうか？いくつかの場合、それはあまりに単純で明白です。爆弾、戦車、ロケット弾、白リン弾は高い壁です。これらによって押しつぶされ、焼かれ、銃撃を受ける非武装の市民たちが卵です。これがこの暗喩の一つの解釈です。

しかし、それだけではありません。もっと深い意味があります。こう考えてください。私たちは皆、多かれ少なかれ、卵なのです。私たちはそれぞれ、壊れやすい殻の中に入った個性的でかけがえのない心を持っているのです。わたしもそうですし、皆さんもそうなのです。そして、私たちは皆、程度の差こそあれ、高く、堅固な壁に直面しています。その壁の名前は「システム」です。「システム」は私たちを守る存在と思われていますが、時に自己増殖し、私たちを殺し、さらに私たちに他者を冷酷かつ効果的、組織的に殺させ始めるのです。

私が小説を書く目的はただ一つです。個々の精神が持つ威厳さを表出し、それに光を当てることです。小説を書く目的は、「システム」の網の目に私たちの魂がからめ捕られ、傷つけられることを防ぐために、「システム」に対する警戒警報を鳴らし、注意を向けさせることです。私は、生死を扱った物語、愛の物語、人を泣かせ、怖がらせ、笑わせる物語などの小説を書くことで、個々の精神の個性を明確にすることが小説家の仕事であると心から信じています。というわけで、私たちは日々、本当に真剣に作り話を紡ぎ上げていくのです。

私の父は昨年、90歳で亡くなりました。父は元教師で、時折、僧侶をしていました。京都の大学院生だったとき、徴兵され、中国の戦場に送られました。戦後に生まれた私は、父が朝食前に毎日、長く深いお経を上げているのを見るのが日常でした。ある時、私は父になぜそういったことをするのかを尋ねました。父の答えは、戦場に散った人たちのために祈っているとのことでした。父は、敵であろうが味方であろうが区別なく、「すべて」の戦死者のために祈っているとのことでした。父が仏壇の前で正座している後ろ姿を見たとき、父の周りに死の影を感じたような気がしました。

父は亡くなりました。父は私が決して知り得ない記憶も一緒に持って行ってしまいました。しかし、父の周辺に潜んでいた死という存在が記憶に残っています。以上のことは父のことでわざわざお話できることですが、最も重要なことの一つです。

今日、皆さんにお話ししたいことは一つだけです。私たちは、国籍、人種を超越した人間であり、個々の存在なのです。「システム」と言われる堅固な壁に直面している壊れやすい卵なのです。どこからみても、勝ち目はみえてきません。壁はあまりに高く、強固で、冷たい存在です。もし、私たちに勝利への希望がみえることがあったら、私たち自身や他者の独自性やかけがえのなさを、さらに魂を互いに交わせることで得ることのできる温かみを強く信じることから生じるものでなければならないでしょう。

このことを考えてみてください。私たちは皆、実際の、生きた精神を持っているのです。「システム」はそういったものではありません。「システム」がわれわれを食い物にすることを許してはいけません。「システム」に自己増殖を許してはなりません。「システム」が私たちをつくったのではなく、私たちが「システム」をつくったのです。

これが、私がお話ししたいすべてです。

「エルサレム賞」、本当にありがとうございます。私の本が世界の多くの国々で読まれていることはとてもうれしいことです。イスラエルの読者の方々にお礼申し上げます。私がここに来たもっとも大きな理由は皆さんの存在です。私たちが何か意義のあることを共有できたらと願っています。今日、ここでお話する機会を与えてくださったことに感謝します。ありがとうございます。